

# 阿閼仏信仰の諸相

佐藤直実  
(京都大学)

## はじめに

大乘仏教経典では、釈迦牟尼仏以外に、阿弥陀仏や薬師仏、阿閼仏などが主役として登場する。阿弥陀、薬師は今日でも日本で信仰の対象とされているが、阿閼仏は、日本のみならず、中国やチベットなどの他の地域でも、今までに信仰されてきた形跡はない。それ故、阿閼仏信仰の実態が学問的に詳細に検討されることはほとんどなかった。

阿閼仏の研究が頓挫している一因に、阿閼仏を主役に描く経典、『阿閼仏国経』(\*Akṣobhyatathāgatasya vyūha-sūtra = AV)<sup>(1)</sup>が難解で、統一感がなく、その意図を汲み取るのが容易でない点が考えられる。同じ内容が章をまたいで繰り返されることもしばしばあり、文意を汲みにくい挿話も多い。

そこで、本稿では、この阿閼仏信仰の実態を明らかにするとともに、阿閼仏信仰における祈りとは何かを考察する。

AVは、大乘仏教の黎明期の経典であり、それ故、阿閼仏信仰の実体を明らかにすることは、未だ不透明な大乘仏教の起源を解明する上でも重要であると考えられる。

## 1 成立状況

使用するテキストは、支婁迦讖訳『阿閼仏国経』(T. 11 No. 313=AVcin1)と『大宝積経』に含まれている菩提流志訳「不動如来会」(T. 11 No. 310(6)=AVcin2)、チベット語訳(P 22 No. 760(6), D 15 No. 50=AVtib<sup>(2)</sup>)の3本である。

**時期** 成立時期は、漢訳の翻訳年代から考えて<sup>(3)</sup>、紀元前100年から紀元後100年の間と考えられる<sup>(4)</sup>。AVは空思想を明確に説かず、仏塔信仰に対する批判もなく、大乘の語もないことから、大乘仏教の最初期の段階に位置づけられている<sup>(5)</sup>。

同時期に制作された經典には阿弥陀仏を信奉する「大阿弥陀経」があるが、同経には阿閼仏や妙喜世界の記述はなく、またAVにも阿弥陀仏や極楽の記述がないため、両者は異なる系統であったと考えられる。

これに対し、小品系「般若経」は阿弥陀仏や極楽に言及しない代わりに阿閼仏や妙喜世界、香象菩薩(阿閼仏の後継者)、金色蓮華仏(香象菩薩の成仏名)、宝幢菩薩など『阿閼仏国経』と共通の内容を多く含んでいる。したがって、AVと小品系「般若経」とは同系統であったと思われる。なお、AVの方が小品系「般若経」よりも成立が早いと推定されている<sup>(6)</sup>。

**成立地** 発生場所は、中央インドより西方地域と推定されているが、現在のところ正確なことはわからない<sup>(7)</sup>。今後『法顕伝』や『大唐西域記』、あるいはゾロアスター教などの他宗教、中国やコータン、ペルシャの歴史書などと比較する必要がある。

**作成者** 大乘経典は表向きは「仏説」と言われているが、実際にはシャーキャムニの言葉をそのまま伝えたものでないことは自明である。そもそも、*evaṃ mayā śrutaṃ*（このように私は聞いた）と伝聞形になっている以上、全ての経典は、弟子が自分の記憶をたぐりながら語ったものであり、仮に当時の内容を正確に残しているとしても、シャーキャムニが直接に言い残した内容とは言えない。したがって、全ての経典にはそれを語った者、すなわち、「作成者」がいたということになる。そして、それがわかれば、各経典の発生源を自ずから特定することができる。

奥書等が残っていないため、作成者を特定することは困難ではあるが、間接的証拠から AV 作成者の仮説を提示したい。

阿閼仏自身がもともと出家比丘であり、内容面でも出家を重視することから、作成者が出家者であった可能性が高い。しかし、声聞乗・独覚乗よりも菩薩乗を重視しているため、従来の教団、いわゆる部派仏教に対しては批判的であったと思われる。また、阿閼仏の誓願に頭陀行の奨励があることから、林住者 (*aranya-vāsin*) が関係している可能性もある。女性に関する記述はあるものの、その成仏への言及は見られないため、女性を成仏の対象とはみなしていないようである<sup>(8)</sup>。仮に女性が書いた経典であるとすれば、当然関心は女性の実践に向けられるはずであり、したがって男性によって作成されたものと推測される。

**対象者** 経典は聞き手があって語られているはずである。それでは、AV は誰を対象として書かれたものであろうか。

経典内部の記述によれば、釈迦牟尼の説法会に参集している聴衆は「比丘千二百五十人」「無数の菩薩大士」「四天王・帝釈天・梵天などの神々」そして「天龍八部衆」である<sup>(9)</sup>。

大乘經典の冒頭部分は初期經典の定型を踏襲しており、その記述をそのまま史実と考えるのは早計であるが、經典の意図が全く反映されていないとも言い切れない。これらの記述から、本經が、声聞乘（特に男性出家者）及び菩薩乘の在家と出家の男女を対象に書かれた可能性が指摘できる。

**目的** 經典の冒頭で、シャーリプトラが「世尊よ、どうか、過去の菩薩の発心と実践と徳性の解説をしてください。」<sup>(10)</sup>「なぜなら、世界に対する慈悲、あるいは、多くの生類と神と人々に利益と幸福をもたらすことになり、また、現在と未来の菩薩大士たちに法や仏の光明を放つことになるからで<sup>(11)</sup>す」と要請する。言い換えれば、本經は「過去の菩薩の発心、実践、そして徳性」を説いているということである。目的は「世界を慈悲で満たす」「神々や生類の利益と幸福」「現在と未来の菩薩に法と仏の光明を照らす」ためであり、「菩薩乗の人々が正覚から不退転となり、より高位の徳性を備えるようになる」ためである。

したがって、AV は、自分のためだけでなく、他のあらゆる生き物の幸福のために、自ら望んで菩薩行を修する者に対して説かれたと考えられる。

## 2 あらすじ

場所は王舎城の靈鷲山、説法者は釈迦牟尼、質問者は舍利弗である。聴衆には、阿難や須菩提をはじめとする比丘、菩薩、帝釈天などの諸天、天龍八部衆がいる。

釈迦牟尼は舍利弗からの要請を請け、阿閼仏の過去の修行について語り始める。

場所は、この世から東方に千仏国土を過ぎたところにある妙喜世界であ

る。説法者は大目如来、聴衆は菩薩のみで、六波羅蜜の行について解説している。この時、阿閼はまだ名前を持たず、一介の出家者として聴衆に加わっていた。大目如来の説法を聞くうちに、自分も無上正等覚を目指そうと心を決め<sup>(12)</sup>、誓いをたてる。すると、その決意が不動であったために、大目如来から「不動」を意味する Akṣobhya、すなわち阿閼と命名される (P5b5, D5a4, N8a6, S7b4, T. 11 752a29, 102b12)。彼はさらに誓願を続け、ついに大目如来から授記される。そして無上正等覚者となり、大目如来に代わって妙喜世界を主催するようになる (P13b5, D11b6, N19b2, S17b3, T. 753 b10, 103b10)。

阿閼が受け継いだ妙喜世界は、彼のなした誓願の通りに、とても住み心地の良い空間に変わる。人々には病気の恐れがなく (P27b8, D23b5, N39a2, S35a7, T. 11 755c13, 105b9)、常に衣食住が満たされており (P27b8-28b6, D23b5-24b1, N39a2-40a4, S35a7-36a7, T. 11 755c17-756a6, 105b14-20)、女性には生理的な苦痛がない (P14b8, D12b6, N21a4, S19a3, T. 11 753c7, 103b25)。また、そこに住む声聞や菩薩の徳性はこの世よりもはるかに優れており、皆迷うことなく精進に励んでいる (第3章, 4章)。阿閼は最期が近づくと、香象菩薩に後継者としての記別を授ける (P52b1, D45b3, N72a2, S66b1, T. 11 760b28, 109a15)。そして、自ら発火し、体を燃やし尽くして般涅槃する (P55b1, D48a6, N76a7, S70a7, T. 11 761a12, 109b21)。最後に妙喜世界に生まれ変わる方法について述べ、経典は終了する (P80a4, D70a6, N111b5, S102 b4, T. 11 764a8, 112c8)。

阿閼の説法の特徴は、声聞地からではなく、波羅蜜の内容から開始される点にある。妙喜世界には、声聞乗と菩薩乗の2つのタイプの修行者がいる。この世と異なる点は、声聞乗は、ほぼ全員が阿羅漢で、菩薩乗は、全員が無上正等覚から不退転な者であるか、もしくは授記された菩薩と等し

いということである。

### 3 妙喜世界の修行＝阿閼の菩薩時代の修行

本経は、無上正等覚を求める菩薩は、阿閼仏の菩薩時代の修行に従って学習するべきであると主張する（P12b4, D11a1, N18a2, S16a5, T. 11 753a21, 103a24）。そのように学習すれば、即座に無上正等覚を得ることができるのである。つまり、AV の主張する実践行は、阿閼の菩薩時代の修行と言い換えられる。

それでは、阿閼の菩薩行とは具体的に何であろうか。

阿閼は、無上正等覚を得るまでに達成すべき事柄を誓願の形で表明している。したがって、誓願内容がそのまま阿閼の菩薩行と考えられる。漢訳とチベット語訳の間には内容や順序に多少の相違はあるが、本稿ではそういった細かな検討はせず、3 訳に共通するものを中心に、誓願の内容を紹介する。

阿閼の誓願は二段階に分かれている。菩薩になるための誓願と無上正等覚を獲得するための誓願である。

彼が一介の比丘だった時に、大目如来に「菩薩の教え（\*bodhisattvaśikṣā, byang chub sems dpa'i bslab pa, 菩薩道, 菩薩教法）の身につけ方」について質問をした（P3b2, D3a7, N4b4, S4b3, T. 11 752a1, 102a25）。それに対して大目如来は、「菩薩の教えを学ぶのは大変難しい。なぜなら、菩薩は全ての生類に対して、

1) 動揺 (mi 'khrugs pa) してはならない

2) 怒りの心 (gnod sems can gyi sems) を抱いてはならない  
からである。」と述べる。<sup>(13)</sup>しかし彼はひるまずに無上正等覚を獲得しよう

と発心し、その心を無上正等覚に回向するという誓いをたてる。誓いの具体的な内容は次の6項目である。

- 1) 瞋恚の心を生じない (P3b7, D3b4, N5b6, S5b1, T. 11 752a8, 102a29)
- 2) 常に一切知者の心を離れない (P4a3, D3b6, N6a3, S5b5, 漢訳欠)
- 3) 声聞・独覚の心を生じない (P4a7, D4a2, N6b1, S6a2, T. 11 752a11, 102b3)
- 4) 愛欲の心を生じない (P4b2, D4a4, N6b5, S6a5, T. 11 752a11, 102b5)
- 5) 貪瞋痴・相手を傷つける・睡眠・昏沈・後悔・怠け心・疑いの心を生じない (P4b5, D4a7, N7a1, S6b2, T. 11 752a12-13,19, 102b5-8,11)
- 6) 殺生・盗み・邪淫・嘘・両舌・悪口・綺語・貪・瞋・邪見の心(十悪)を生じない (P5a5-8, D4b5-7, N7b3-7, S7a2-6, T. 11 752a15-17, 103b10-11)

これらは、いずれも自分自身の心のあり方を見つめたものである。この誓いを聞いた大目如来は、その後、阿閼が全ての生類に対して動揺しない様子を見て、不動を意味する阿閼の名を与えた。この時から彼は阿閼菩薩と呼ばれるようになる (P5b5, D5a4-7, N8a6-b4, S7b4-5, T. 11 752a29-b2, 102b12-14)。菩薩となった阿閼の誓願はさらに続く。彼の誓いの内容は「自分への戒め」と「他人に関するもの」の二つに分類できるだろう。

「自分への戒め」は10項目ある。

- 7) 常に仏を思念する
- 8) 言った如くに行う
- 9) 生まれ変わる度に出家する
- 10) 生まれ変わる度に頭陀行を行う
- 11) 生まれ変わる度に法の弁才者になる
- 12) 三威儀(行住座)のままにいる

- 13) 説法者がいれば必ず聴聞する（蔵訳のみ）
- 14) 外道の沙門やバラモン，他の神々に帰依しない
- 15) 平等に布施する
- 16) 夢精をしない

他人に関連するものは11項目である。

- 17) 手振り身振りで説法しない
- 18) 微笑しながら女性に説法しない
- 19) 剃髪者と糞掃衣を着た人に対して「如来」「如来の塔廟」という思いを生じる（蔵訳のみ）
- 20) 他の菩薩に対して「教師」という思いを生じる
- 21) 罪人（支識訳では孤窮の人）を体を擲って守る
- 22) 罪を犯した衆生に対して断罪しない
- 23) 衆生に根本的な墮落心を生じさせない
- 24) 自分の仏国土には罪や欠点をもった弟子がいないように努力する
- 25) 自分の仏国土が清浄になるように努力する
- 26) 自分の仏国土では出家菩薩（蔵訳は出家声聞も含める）も夢精しないように努力する
- 27) 自分の仏国土では女性に欠点がないようにする

このうち、17)～22)は自分への戒めに含めることもできるので、純粹に他人のための誓いは23)～27)の5項目ということになる。第一段階の誓願を含めると、自分への戒めの方が他人に関するものよりも多く、自分に厳しい傾向にあることがわかる。

ここまで、阿閼の菩薩時代の修行の在り方を、誓願の中から見てきたが、誓願形式をとらずに説かれている箇所も、わずかながらある。それが、次に挙げる4項目である。

- 28) 人が自分の目や四肢を欲すれば、いつでも施す (P20a3, D17a3, N28a5, S25b1, T. 11 754b25, 104b4)
- 29) 生まれ変わる度に諸仏を供養する (P20a7, D17a6, N28b4, S25b7, T. 11 104b9, AVcin1 なし)
- 30) 生まれ変わる度に仏国土を遍歴し、諸仏に見える (P20b1, D17a7, N28b6, S26a1, T. 11 754c1, 104b10)
- 31) 生まれ変わる度に禁欲行を行う (P20b1, D17a7, N28b6, S26a1, T. 11 754c1, 104b10)

28) は他人に対する行動であるが、29)～31) は自分自身への戒めである。誓願の内容と同様、阿閼の菩薩行は、自分を戒めることに重点を置いていると言える。

阿閼仏信仰が阿弥陀仏のように流行しなかった理由として、藤田宏達氏などは誓願内容が阿弥陀仏に比べて自力的、つまり自分に厳しいためであると述べており (藤田 [1970: 423-424, 426]), 確かにそういった傾向を確認することができる。

以上の通り、これらの28項目が阿閼の菩薩行である。つまり、これがAVが推奨する菩薩の修行の在り方である。これらを修すれば、即座に無上正等覚を得ることが必ずできるのである。

阿閼仏が成仏を証明しているのです、修行者は安心して彼と同じ修行に勤しむことができる。ただ、勤しむにはいささか厳しい内容になっているため、よほどやる気のある人でないと実際に実践するのは難しいと思われる。

#### 4 妙喜世界への再生方法

さて、AVは、阿閼の菩薩行を勧めると同時に、妙喜世界への再生も促

す。再生するための要因がいくつか説かれるが、大別するとそれらは他力因と自力因とに分かれる。

他力因は、阿闍が菩薩時代になした誓願の力である。菩薩乗の人々も声聞乗の人々もすべからく、この誓願力によって、妙喜世界に再生することができる、と説かれる（P66a1, D57b4, T. 11 762c19, 110c28）。

それならば、再生するにはこの他力因だけで充分のようにも感じるが、AV は、自力因、つまり修行者自身が行うべき実践についても説く。

阿闍の法門、すなわち、阿闍仏の徳性を完全に説いた法門を聴聞し、信じ、理解し、保持し、読誦し、精通し、他人にも正しく説くこと。（P68b5, D60a3, T. 11 763b3, 111b8, etc）

上記の内容は声聞乗と菩薩乗の両者に対して説かれており、何度も繰り返される。

上記以外にも、菩薩乗だけを対象にした自力因が説かれる。

- ・自分も阿闍と同じような菩薩行を完成させようと発心する（P58a8, D50b7, T. 11 761b26, 109c26）
- ・自分の仏国土でも阿闍の声聞のような者が生じるよう努力しようと発心する（P60a8, D52b4, T. 11 761c17, 110a7）
- ・自分の仏国土が妙喜世界のように最高の形になるよう努力しようと発心する（P60b4, D52b7, 漢訳なし）
- ・正覚に関して、正しく説き、確立し、讃え、喜ぼうと発心する（P62 a4, D54a5, T. 11 762a3, 110b13）
- ・六波羅蜜の善根を正覚と阿闍に回向する（P58b4, D51a3, T. 11 761b29, 109c28）
- ・三種随念の善根を衆生のために回向する（P59b7, D52a4, T. 11 762a12, 110a25）

- 阿閼の法と僧団を随念する (rnam pa las rjes su dran pa) (P59b2, D51b7, T. 11 762a8, 110a24)
- 阿閼の光明を随念する (P60a5, D52b2, T. 11 761c14, 110a4)
- 十方の仏法僧を随念する (P61b6, D53b7, T. 11762a26, 110b8)

自力因で最も重要な「阿閼の法門を聞く」ということは、実のところ簡単なことではない。善根が足りない人間は阿閼の法門を聞くことができないからである (P75a1, D65b3, 一, T. 11 112a10)。さらに、阿閼の法門を聞くためには、「仏の力」と「各自の善根力」の2つが必要であるとも述べる。言い換えれば、自分の力だけでは阿閼の教えを聴聞することはできないし、逆に、仏の力だけに頼っても教えを聞くことはできないということである。両方の力が備わった時に初めて、教えを聞き、理解できるようになるのである。

AV は、仏と信仰者つまり実践者との関係を、救済する側が、される側の願いをかなえる、といった単一方向の関係ではなく、信仰者の積極的な努力と仏の力があいまって初めて目的が成就される、といった双方向の関係として受けとめていると言える。信仰者が実践した時にはじめて仏の力が効力を発揮するのである。

## 5 『阿閼仏国経』における祈り

ここで、テーマの「祈り」に立ち返って考察したい。「祈り」とは、実践的には「禅定」と言える。八正道の「正定」や六波羅蜜の「禅定波羅蜜」、三学の「定」など、仏教では禅定、すなわち瞑想は必須の実践事項である。しかし、AV の中では「瞑想」への言及は少ない。それでは、阿閼仏信仰では「祈り」は必要なかったのだろうか？ はたして「祈り」を

重視しない信仰があるのだろうか？

ここで、筆者は「祈り」を「仏」と「信仰者」を結びつける行為であるという解釈を提示したい。ここまでの考察から、阿閼仏信仰の特徴は、仏と信仰者との関係が、仏からの一方的な救済でもなければ、信仰者の一方的な努力でもない点にあることを指摘した。つまり、信仰者が積極的に実践することで、仏の力が発揮される関係が成り立っているのである。そう考えるならば、阿閼仏信仰における祈りとは、信仰者の努力と仏の救済という双方向の結びつきであると言えるのではないか。「祈り」の定義が確定しない現状で明確な結論を出すことはできないが、この仮説を提示することで、より活発な議論を喚起したい。

#### 注

- (1) サンスクリット原典が現存しないためチベット語訳に記される転写から便宜的に記した。佐藤 [2001: 36] の註(1)を参照。
- (2) 各版本写本の概要や、諸本の伝承系譜については佐藤 [2001] 参照。
- (3) AVcin1は、『出三蔵記集』の記載から桓帝(146-167) 靈帝(168-189)の時代、すなわち、二世紀後半と推定される。『歴代三宝紀』(T. 49 69a)には記載があるものの現存しない支道根訳『阿閼仏刹諸菩薩学成品経』は太康年間(280-289)、すなわち3世紀末と考えられる。AVcin2は、『大宝積経』序(T. 11 1b)によれば、神龍2年(706)から先天2年(713)の間の翻訳である。
- (4) 平川 [1989: 214-215] を参照。
- (5) 静谷 [1974] は、このように「大乘」の語を用いない大乘経典を「原始大乘」と命名し、『道行般若経』以降を「初期大乘」と称し、両者を区別した。同書では、AVcin1を支謙訳『大阿弥陀経』と共に、原始大乘経典に分類している。
- (6) 小品系「般若経」は「大乘」の語を用い、般若波羅蜜や空の実践を強調しており、初期経典に見られない大乘特有の思想を多く含んでいる。平川 [1989: 195]、藤田 [1970: 232-233] 参照。
- (7) 望月 [1930: 448-449] は、阿閼の仏国土が「東方」にあることから、聖なる地インドを「東方」とするベルジャなどの諸国でAVが作られた、と

指摘する。AVと関係の深い *Aṣṭasahasrikāprajñāpāramitā* (=Vaidya [1960]) 第30章でもサダープラルディタ菩薩の東方求法物語が述べられる。サダープラルディタの目指す憍陀越国(ガンダーラ?)の描写が妙喜世界と類似することから、西方の熱心な仏教徒の間からインド崇拜が興り、東方仏国土の思想が発生し、AVにいたったのではないかと推定している。その後、望月説を後押しするかのようになり、芳岡 [1959] が、中インドを遠く離れた亡命者が「釈迦教化の故地を偲ぶ自然の情から生まれ出たもの」という見解を発表している。同稿では、その根拠に、多くの初期大乘経典が月氏国の僧侶によって翻訳されている事情や中央アジアからサンスクリット写本が多く発見されていること、『法顕伝』、『大唐西域記』やコータンの歴史書の記述を挙げている。また、AVの「悪魔の降伏」「三十三天とこの世を結ぶ三宝の梯子」「薬樹があり、無病で、出産の苦しみがない」などの記述がゾロアスター教と一致もしくは類似することから、同教の影響を受けて西域や西北インドで生まれたとも推測している。これらは刺激的な見解ではあるが、同稿は2ページほどの小論であるため論証にはより詳細な研究が必要である。Dantinne [1983: 1] は、AVcin1の漢訳語の音分析により、インド原本がパミール東方地域のガンダーラで書かれたことを明らかにしている。そして成立地はインド西北地域の可能性を指摘している。これらの研究から、AVの成立地はインドの中央や南方ではなく西方もしくは西北地方であった可能性が高いと言える。しかしながら、AV自身は妙喜世界の位置を「ラージャグリハから東方千仏国土離れた場所」と示しているため、西方と断言することはできない。

- (8) 佐藤 [1998] 参照。
- (9) ただし、これらの人数は、経典の終わりでは多少変化している。比丘の人数は「五千人」に増えており、菩薩大士に関しては、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に細分され、それぞれに具体的な人数が記される。(P79b2, D69b5, N110b6, S101b5, T. 11 112c1-2)。また、ここで興味を引くのは、声聞乘には比丘尼や優婆塞、優婆夷が記されない点である。
- (10) de ni skye bo mañ po la sman pa dañ / skye bo mañ po la bde ba dañ / 'jig rten la sññ brtse ba dañ / skye bo phal po che dañ lha dañ mi rnam kyī don dañ / sman pa dañ / bde bar 'gyur la / da ltar dañ ma 'oñs pa'i byañ chub sems dpa' sems dpa' chen po rnam la yañ 'di ltar chos kyī sgron ma'i snañ ba dañ / 'di ltar sañs rgyas kyī snañ bas snañ ba bgyis par 'gyur žiñ spro ba sstas bar yañ 'gyur ro // (P2a8, D2b1, N3b4, S3b5, cf. T. 11 751c7, T. 11 102a12)

- (11) de lta lags pas byañ chub sems dpa'i theg pa pa'i gañ zag rnam's kyis sñon gyi byañ chub sems dpa' sems dpa' chen po de dag gi 'jug pa dañ / spyod pa dañ / spro ba dañ / sems bskyed pa dañ / go cha dañ / yon tan yoñs su brjod pa dag thos na de bñin du bslob ciñ de bñin du sgrub par 'gyur ro // (P2b2, D2b3, N3b6, S3b7, cf. T. 11 751c11, T. 11 102a14) de dag de ltar bslabs śiñ de ltar bsgrubs pas bla na med pa yañ dag par rdzogs pa'i byañ chub las phyir mi ldog par 'gyur źin / yon tan de lta bu dag dañ ldan par gyur nas kyañ slar źiñ goñ nas goñ du yon tan śin tu khyad par can dag kyañ thob par 'gyur lags so // (P2b4, D2b4, N4a1, S4a2, cf. T. 11 751c3, T. 11 102a15)
- (12) bla na med pa yañ dag par rdzogs pa'i byañ chub tu sems bskyed pa (P3b6, D3b3, N5b4, S5a7), 癸無上正真道意 (T. 11 752a6), 癸阿耨多羅三藐三菩提心 (T. 11 102a28)
- (13) byañ chub sems dpa'i bslab pa ji ltar bcas pa la deñ sañ bslab par śin tu dka'o // de ci'i phyir źe na / dge sloñ 'di ltar byañ chub sems dpa' sems can thams cad la mi 'khrugs par bya ba dañ / gnod sems can gyi sems mi bskyed par bya ba'i phyir ro // (P3b4-5, D3b1-2, N5b1-2, S5a5-6) 如結願學諸菩薩道者甚亦難。所以者何。菩薩於一切人民及蝸飛蠕動之類。不得有瞋恚。(T. 11 752a3-4), 汝今當知。菩薩教法難可修習。何以故。菩薩於諸衆生不生瞋害心故。(T. 11 102a26)

### 参考文献

- Dantinne, J. [1983] *La Splendeur de l'Inébranlable*, tome I, Louvain.
- Vaidya, P.L. [1960] ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (Buddhist Sanskrit Texts 4), Darbhanga.
- 佐藤直実 [1998] 「『阿閼佉国経』と女性」(『仏教史学研究』41: 37-61).
- 佐藤直実 [2001] 「『阿閼佉国経』チベット語訳資料について」(『日本仏教学会年報』66: 35-47).
- 静谷正雄 [1974] 『初期大乘仏教の成立過程』, 百華苑.
- 平川 彰 [1989] 『初期大乘仏教の研究 1』(『平川彰著作集』3), 春秋社 (平川彰 [1968] 『初期大乘仏教の研究』, 春秋社の増補再刊).
- 藤田宏達 [1970] 『原始浄土思想の研究』, 岩波書店.
- 望月信享 [1930] 『浄土教の起源及発達』, 共立社.
- 芳岡良音 [1959] 「阿閼佉の浄土の起源」(『印度学仏教学研究』7 (2): 555-556).